昭和51年8月16日第三種郵便物認可
平成24年8月1日発行
毎月1回1日発行 通巻第446号

9
2012 September

人間学を学ぶ月刊誌

chichi

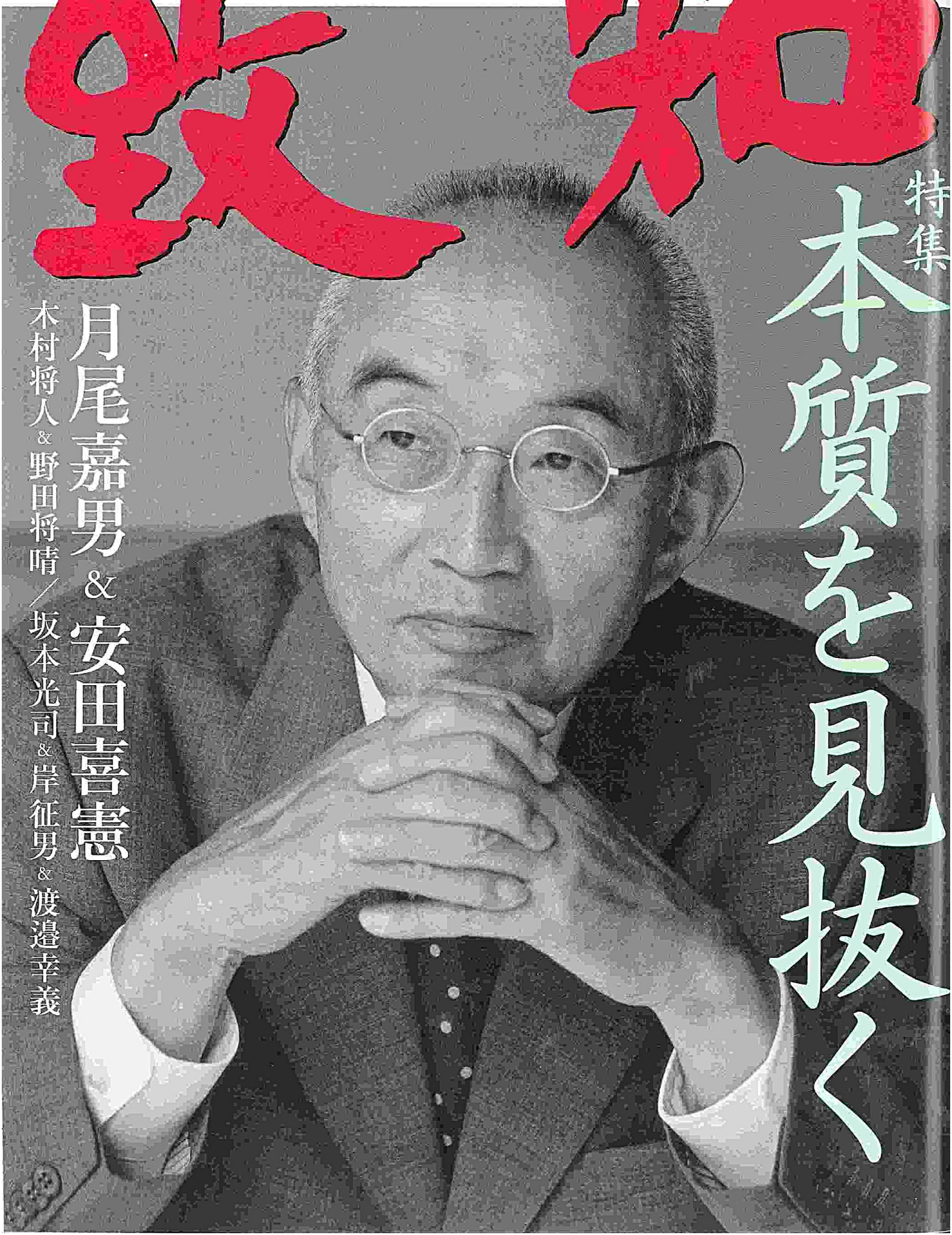
致知

特集

本質を見抜く

月尾嘉男 & 安田喜憲

木村将人 & 野田将晴 / 坂本光司 & 岸征男 & 渡邊幸義



chichi 致知 CONTENTS

8月度致知読者の集いは、お盆のため、例年通り休会となります。

連載

私の座右銘
石黒和義 JBCCホールディングス最高顧問 ―― 68
不染居

第一線で活躍する女性
岡崎朋美 スピードスケート選手 ―― 70
諦めない気持ちが私という人間を強くしてくれた

生涯現役㉙
朝倉 摂 舞台美術家 ―― 74
精神を絞り込み演劇の常識を破り続ける

儒者たちの系譜⑯
疋田啓佑 福岡女子大学名誉教授 ―― 92
三輪執齋

二十代をどう生きるか㉓
岸良裕司 ゴールドラット・コンサルティング日本代表 ―― 96
「人のせいにしない」と心に誓う

人生を照らす言葉㊺
鈴木秀子 文学博士 ―― 100
ロバート・ブラウニング「春の朝」

生命のメッセージ㊾
佐治晴夫 理学博士 鈴鹿短期大学学長 ―― 104
すべてを繋げる宇宙の世界

子供に語り継ぎたい『論語』の言葉⑥
村上和雄 筑波大学名誉教授
之を好む者は、之を楽しむ者に如かず

空海の言葉に学ぶ生き方のヒント②
安岡定子 安岡活学塾 銀座・寺子屋こども論語塾専任講師 ―― 112
四種曼荼羅各離れず

矢山利彦 Y・H・C・矢山クリニック院長 ―― 114

意見・判断⑫
山下俊一 福島県立医科大学副学長 福島県放射線健康リスク管理アドバイザー ―― 116
放射線リスクのいま 福島からのレポート

歴史の教訓
渡部昇一 上智大学名誉教授 ―― 120
生きる上での自由があればそれで十分である

語り継ぎたい美しい日本人の物語㊸
占部賢志 中村学園大学教授 ―― 126
私塾に見る師弟の絆

大自然と体心
小池義孝 一義流気功治療院院長 ―― 130
ねこ背はカンタンに治る

干支九星学
井上象英 ―― 134

小説・儒の人 水戸光圀⑬
童門冬二 作家 ―― 144

致知随想 ―― 85
鎌田 洋 すべては相手のWINのために
阿部宣男 「復興の光」となれ
久田順子 女子教育を通して日本人の心を伝える
松居 友 壁のない社会へ
大堀健二 正直に、真面目に、分かりやすく
薬丸康夫 先人の遺風を後人に伝うるは吾人の務めなり

まんがへうちの社長の器学〉
神保あつし ―― 143

「致知と私」読者から寄せられたお手紙 ―― 66
「森 信三先生に学ぶ一日セミナー」を開催 ―― 78
致知出版社ニュース ―― 111
読者プレゼント ―― 137
BOOKS[書評] ―― 138
こまく ―― 141
致知読者の集い[講師 北 康利] ―― 150
木鶏クラブ通信 ―― 152

議会で新たな決議がなされました。なんと温室植物園を閉園し、熱帯植物園をつくるというではありませんか。

突然の決定に驚いたのは私だけではありません。すぐに二千名以上もの署名が集まり、嘆願書を提出するも決定は覆りません。それでも続けた懸命な訴えが区長の耳に届いたのでしょう。適当な施設を見つければ、ホタルの飼育を続けてもよいということになりました。

大急ぎで見つけた移転先は、以前学童保育で使われていた築三十年のおんぼろ建物。しかし、贅沢を言っている時間はありません。すぐに冷房室の生き物や植物、そして羽化したホタルを手作業で移していきました。

しかし、ある日突如として園内の取り壊し工事が行われ、私が夕暮れ時に駆けつけた頃には土はすっかり掘り返され、山と積まれていたのです。あまりの出来事に私は呆然としました。そして悔しい気持ちをぶつけるように、泥の山を手で掘り返し始めたのです。すると土の中から一匹のホタルがふらふらと舞い上がり微かな光を放ち、そして闇に消えていきました。

その瞬間、それまで堪えていた涙がとめどなく溢れてきました。そして、生き残ったホタルを必ず守ろう、そう誓った私の心のうちには、もはやホタルを怖がる気持ちは消えていたのです。

その日を境に私は一日も休むことなく、ホタルの飼育と研究に没頭しました。施設内に飼育室や展示室を設け、その隣に新設したガラスハウスには自然環境を再現した「せせらぎの空間」をつくり、区民がホタルを観賞できるようにしたのです。

そして七年におよぶホタル研究の成果が大学助教授の目にとまり、一度は大学を中退した私が、大学院で理学博士の博士号を取得し、「ホタル博士」と呼ばれるようになりました。人生とは分からないものです。

日本各地でホタル再生に携わるようになって既に十年が経ちました。特に環境汚染がひどいところでは、独自に開発したナノ純銀粒子を使った手法で環境改善を成功させてきたのです。そしていま、この技術が高放射線を減弱させる効果を有することが、実験結果から明らかになってきました。実用化への道筋をつけることが、目下一番の課題といえるでしょう。

熊川の川辺に再びホタルを蘇らせることができたその時、その光の饗宴が復興の確かな光となる——。新たな使命を胸に、これからもホタル一筋の道を歩んでいく覚悟です。

（あべ・のりお＝板橋区ホタル生態環境館長）

女子教育を通して日本人の心を伝える

久田順子

私たちの久田学園佐世保女子高等学校（長崎県佐世保市）には全国どこにもない教育の特徴があります。「箸の持ち方」を入試に導入したこともその一つです。持ち方の善し悪しもさることながら、この単純な動作をとおして子供たちの普段の生活が見えてくることに意義があるのです。

ゴールデンアワーのテレビの定番といえばグルメ番組。しかし、タレントたちの食に対する意識の低さ、食べ方は目を覆いたくなるほどで、「箸使い」も正視できるものではありません。これもまた著名人たちの普段の心の在り様を物語っているといえないでしょうか。

平成三年、私は全国約二百のテレビ局に「食文化向上キャンペーン」と題する文書を送付し、「テレビの料理番組の登場者には正しい箸の持ち方ができる人を」と訴えたことがありますが、あれから二十年、箸文化への関心は薄れる一方という現実は嘆かわしいかぎりです。

その悪影響は自然と子供たちにも及び、ある調査によると正しく箸が持てる高校生は六割。私が関わる女子高生もその多くが箸の正しい持ち方を躾けられないまま成長した現実は重く受け止めなくてはいけないと思います。

正しい箸の持ち方ができない人は行儀作法だけではなく相手への敬意や人間的魅力にも欠けています。

モノやカネを手に入れることを最優先する価値観の社会の中で、本学園があえて箸の持ち方を入試に取り入れ、三年間かけて熱心に食育に取り組むのも、それが将来母親となるであろう子供たちの生涯の土台になると考えるからです。

このように日本人の心に焦点を当てた教育こそ、明治三十六年の創立以来の本学園の伝統に他なりません。

創立者で祖母の久田ワキは「社会に貢献する女性の育成」「家庭のよき教育者の育成」の志を掲げ、裁縫を軸として女子に人間教育を施そうと二十四歳で学園を立ち上げました。

明治という時代、若い女性が一事を成し遂げる困難さを思えば、建学の苦労は筆舌に尽くしがたいものがあったことでしょう。

私は東京の大学を卒業した後、学園の教師となり、三十年前、母の志を継いで三代目理事長・校長に就任しました。祖母も母も確固たる信念の持ち主で教育

に注ぐ情熱は半端ではありませんでしたが、反対に地位や財といったものには淡泊な人でした。

その人間教育の伝統を継ぎ、本学園は現在に至るまで、人間らしい正直な生き方さえしていれば、爽やかに幸せになれるという人生観、教育観を校風としています。

その実現のため、正課の授業に加えて茶道、華道、剣道、さらに美しい着装を学ぶ装道（礼法）を導入し伝統文化による人づくりを目指すほか、終礼では「至誠に悖るなかりしか」「言行に恥づるなかりしか」など五つからなる海軍五省を唱和。さらに全校朝礼時には社会教育家の蓮沼門三先生の「明魂」と題する長文を覚え、全員で暗唱することを常としています。

もちろん、規則面も甘くはありません。茶髪、ピアス、マニキュアなどは一切禁止。もし規則を破ればお寺での修行で心身を清めることが課されます。こういう一つひとつの積み重ねによって子供たちの人格向上にいささかでも寄与できたらというのが私たちの願いでもあるのです。

本学園は一学年の定員が四十名という小規模校です。私は、佐世保弁で「善かことも悪かことも、すぐに校長先生の目と耳に入ってくるとよ」とよく冗談を交えて話しますが、一人ひとりの顔が見え、特性に応じたきめ細かな指導ができるのも、このような小規模校なればこそでしょう。

しかし、少人数ゆえに運営が決して楽でないことも確かです。校長に就任して三十年、特別に何の才能も取り柄もない自分が限られた資金をやりくりしながらよくぞここまで学園運営を続けられたものだという実感がこみ上げてきます。

これも子供たちやご両親、地元の皆様に支えていただいたおかげ。そう思うと感謝以外の言葉はありません。

創立以来「日本の文化」「日本人の心」を大切にした教育方針に徹してきたという意味では、全国の高校五千五百校の中でも当学園は極めてユニークな存在といえるでしょう。日本人の精神文化が失われ教育崩壊が進む現状を思うと、これをなんとかしなくてはという使命感に駆られる一方、自らの非力を痛感するばかりです。

私は今年七十六歳になりました。これからも日本人の生き方を問い続けながら当学園の教育の灯を絶やすことなく、信じる道を愚直に歩み続ける覚悟です。日本の西端・佐世保の地から全国にメッセージを発信し続けて参ります。

（ひさた・じゅんこ＝久田学園佐世保女子高等学校理事長・校長）

壁のない社会へ

松居　友

フィリピンに縁もゆかりもなかった私が現地へ初めて赴いたのは一九九八年、間もなく五十歳の節目を迎える頃でした。

かつては出版社で児童書部門を立ち上げ、編集長として活動していましたが、もっと人や自然と直接関わりたいという思いが募り、退職して北海道に移住しアイヌや琉球の先住民族の研究と著述に没頭しました。充実した毎日でしたが、私生活で躓き、精神的に深いダメージを受けた私は、しばらく日本を離れて心を立て直したいと考え、親しい神父さんのご紹介でフィリピンの孤児施設を訪れることになったのです。

現地の生活はとても貧しいものでしたが、人々は皆純朴で、とりわけ子供たちの人懐っこさには心底癒やされました。歩くのもままならないほどの失意から私を立ち直らせてくれたのは、他ならぬ子供たちの無垢な笑顔でした。彼らに強く心惹かれた私は、現地にたびたび足を運び、学費の支援を通じて交流を育むようになったのです。

二〇〇二年に現地に滞在していた時、近くのイスラム地域で戦闘が起こっているという情報が入りました。視察に行った私は、遙か地平線の先まで難民で埋め尽くされた光景に言葉を失いました。

フィリピンのミンダナオでは四十年も前から戦闘が繰り返され、その度にたくさんの難民が発生していました。しかし、9・11以降戦争はアフガニスタンに移り、支援に訪れていた国際NGOも潮が引くように去っていきました。生活の場を失った難民たちは、椰子の葉で雨露をしのぐような貧しい生活を余儀なくされていたのです。

何より辛かったのは、そうした生活の中で子供たちが笑顔を失っていくことでした。傷ついた彼らのために何かしてあげたい。そう考えて始めたのが読み聞かせでした。児童書の編集を通じ、絵本が子供の心のトラウマを解消する力を持っていることを知っていたからです。

このささやかな試みがNGOへと発展したのは、怪我をした子供たちを見かねて自費で病院に連れて行こうとしたところ、まずNGOに所属する必要があると言われたのがきっかけでした。学費を支援していた若者たちに相談すると、彼らは手探りで法人と医療の資格を取得してくれ、それをもとに立ち上げたのが、「ミンダナオ子ども図書